

「歯を守れ！予防歯科に命をかけた男」を読んで

総合診療医 相浦早紀

訪れたことのある酒田という場所、日吉歯科の風景の記憶を辿りながら、活字を追いかけることに不思議な感覚を抱きました。著者の新鮮な感覚が曾ての自分を思い起こさせると同時に、現在の自分を客観視する機会となりました。毎日を過ごすことで精一杯で、何にも変わっていないように感じていた私に、ちょっぴり成長した自分も認めさせてくれ、ほんの少し嬉しくなり、でもまだまだ一筋の光をも塞いでしまいそうな程の課題があることに気づきました。

本を読みながら、なぜが高校時分に友人が言った一言をふと思い出しました。「歯磨きしなくても虫歯にならないんだよね」と。当時、歯科の知識が全くない私は「何を言っているの？」とだけ思った記憶があります。そこにリスクという概念が絡んでいるのかもしれないと考えると、あの友人の何がそうさせていたのだろうか、今となっては確かめられない事実には悔しさを感じてしまいました。よく「私は歯が弱かったから…」という言葉を目にしますが、それは防ぐことが可能な弱さだったかもしれないと叫びたくなる時があります。これこそが私たちの行なっていることの大きな意味なのかもしれません。正しい知識を持つこと、それが根底にあって初めて全ての治療や技術が成立すると考えます。

著者がみた一人物を詳細にとらえたこの本から、これまでのその人物の努力や功績が如何程だったのかと想像に難くありません。最後に著者が記した「「さん」が似合わない人」という表現に、どうしてか、しっくりきてしまいました。